幼児期は記憶力の強い時期

とは言うものの、能力を越えた足の過度の使用は逆に足を痛めるように、その頭で処理できない問題を与えたのでは、頭の働きは決して良くなりません。進んで、喜んで頭を使うような、そういう問題を与えることが大切です。

重度の脳障害児、精蕩児が言葉を覚えないのは、言葉がその子供たちにとって余りにもむずかしいものだからです。

普通の人間は、母国語を覚えるのに苦しんだという記憶がありません。気がついた時には、すでに母国語が自由自在に操れるようになっていたのです。だから、言葉を覚えるのはやさしいことだと、誰もがそう思い込んでいるのです。

ところが、同じ言葉でも外国語だと、だれも決してやさしく覚えられるとは思っていないでしょう。なぜ、母国語だとやさしく、外国語だとむずかしくなるのでしょうか。

実は、それを学習する時期の違いにその原因があるのです。外国語の学習がむずかしいように、言葉というものはもともとは覚えにくいものなのです。言葉は、発生するやいなや消えてしまうので、発せられた瞬間に、これを捕えなければならないからです。

機関銃のようにあわただしく連続して発せられる、微妙な違いのある多くの音声を、片っぱしからこれを正しく捕えて、これを頭の中に刻みつけていくことは、並たいていの能力でできることではありません。能力が高くても、同じことを何十回となく反復して耳から入れない限り、とても覚えられるものではありません。

幼児期は、そういう繰り返しに耐えられる、というよりも繰り返しの大好きな時期で、かつ最も記憶力の強い時期なので、言葉を覚えるのに苦痛を感じないのです。だから、幼児期を狼少女･カマラ（二三〇ページ参照）のようにまったく言葉を耳にしないで過ごしてしまうと、もう言葉が覚えられなくなってしまうわけです。